

# 「清水彦介の近代——近代図書館の曙光——」

石 黒 志 保

## はじめに

一治一乱ハ天下ノ勢ニシテ常ニ永ク平ナル能ハザル者也。徳川氏ノ治ヲナス殆ド三百年太平極ルト云フベシ、(中略)世人徳川氏ヲ罪スルニ王室ヲ蔑如シ人民ヲ壓制スルヲ以テス、是レ時勢ヲ知ル者ニ非ル也、大名ト云ヒ士族ト云ヒ昔時ニ在テ皆壓制ヲ極メタル者也、何ゾ独徳川氏ヲ罪スベケン哉、王室ヲ蔑如スト云者ハ鎖港ヲ開キ攘夷セザルヲ以テスルニ非ズヤ、数年ナラズシテ今万国交際ノ世トナルハ何ゾヤ、<sup>①</sup>

これは米沢藩士の家に生まれ、戊辰戦争に従軍、戦後には興譲館皇学二等教授、白子神社祀官として、また『米沢新聞』『奥羽新報』『置賜新聞』と、次男の目賀多信順とともに置賜地方で新聞を刊行した清水彦介(一八二一—一八九五)の書いたものである。新聞の刊行はそれぞれ短命に終わったが、米沢における近代化及び自由民権運動の流れを見るに重要な人物である<sup>②</sup>。この「戊辰乱ノ起源」はいつ頃書かれたのか不明であるが、ここで清水は戊辰戦争を回顧し、徳川の世を評している。乱世かそうではないか、それは天下の勢によるものであり、常に永く太平であったことはなかった。しかし、徳川の治政下ではおよそ三百年の間、太平の世であった。その徳川の世を罪するために王室(皇室)を蔑如し、人民を壓制してきたことを挙げるのは誤りであると述べる。徳川の世だけではなく、昔時はみな壓制を敷いており、そのことを知らずに徳川のみを罪するのは時勢を知らない者のすることである、と清水はいう。

さらには天皇を敬いながらも鎖国を解き、その上「攘夷」と言うのはどういふことだろうか。「攘夷」をしておきながら数年足らずで、鎖国を解き、万国交際の世となっているのは何故なのか、このように当時の情勢を清水は説いている。

米沢藩は戊辰戦争で幕府側として仙台藩とともに奥羽越列藩同盟の盟主国として戦ったが、清水のここに見る世情は単に敗者としての考ではない。「討会ハ王命ト云ト雖薩長ノ王命ヲ仮テ私怨ヲ報ナル所也」、会津藩を討つことは王命といえども、薩長は王命の威を借りて私怨をはらそうとしているだけだ。このように述べ、「背テ従フヘカラズ」と藩が決めたのである。そして「一旦賊名ヲ佩フト雖其天下後世二功」を残すこと<sup>③</sup>、この思いが清水にとっての近代の始まりであった。

清水のここに見る米沢藩士としての明治近代国家への意識は、たとえば藩の探索方を勤め、戦後処理にも奔走した宮島誠一郎（一八三八―一九一一）と通ずるところもあるだろう。宮島は、維新後の明治五年（一八七二）四月、いち早く「立国憲議」を唱え、新国家構想を練り上げる。それは「戊辰雪冤」のために「政府に対し愚忠を尽」すこと、その思いからだったという<sup>④</sup>。

宮島は明治十三年（一八八〇）二月に設置された「興亜会」（のち亜細亜協会と改称）において、「亜細亜ハ欧羅巴ノ輕侮ヲ受ルヲ免レズ」、このままだと「亜細亜ハ到底欧州ニ及フ能ハズ」と主張する<sup>⑤</sup>。この興亜会は元々、明治十年当時、ヨーロッパがアジア侵略を進めていたことに危機感を募らせていた曾根俊虎（一八四七―一九一〇）が明治十年に組織した振亜会を母体としている。曾根は清水彦介の実兄である曾根俊臣の子であり、さらに清水の四男貞四郎を養子にした縁故ある人物である。そして、会の中心人物であった渡邊洪基（一八四八―一九〇二）は幕府医学所頭取の松本順に随い会津、米沢と従軍し、米沢で藩から医学と英学の振興のために藩医筆頭の高橋玄勝に引き止められ、洋学校設立に尽力<sup>⑥</sup>、米沢の近代を考えるに重要な人物である。曾根も渡邊から教えを受け、さらに江戸で慶應義塾長であった吉田賢輔に学び、明治四年（一八七一）には海軍に入り、明治六年には日清修好条規批准のために

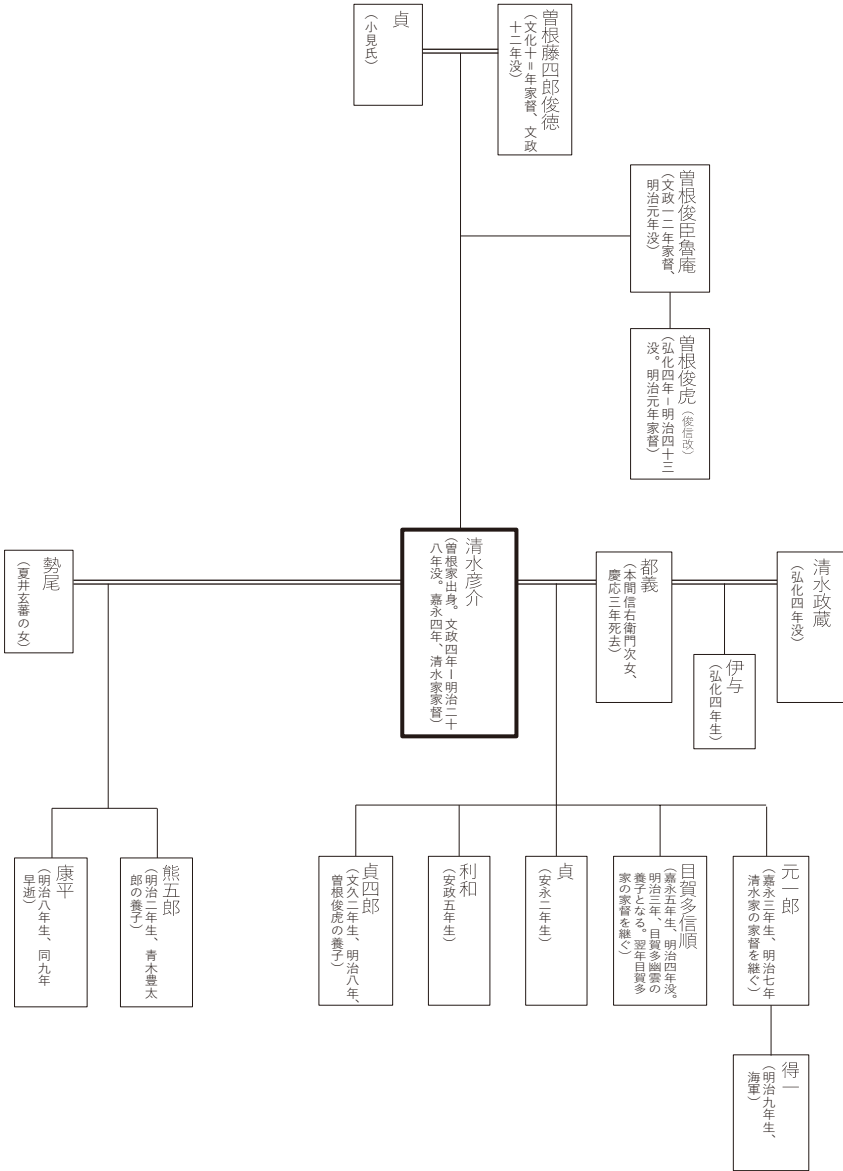
副島種臣の随員として清に渡つて以降、清の情勢通として活躍した<sup>⑦</sup>。その曾根が清との関係強化のために振亜会を組織、その後、興亜会と名を変え、アジア主義を打ち出していった。その会のメンバーは戊辰戦争で賊軍、旧幕臣に属し、政府の反主流派、様々な政治的立場を取る人たちの集まりではあったが、明治十二年の琉球処分により悪化した日清問題を密にし、アジアの振起、独立を願うグループであった<sup>⑧</sup>。その第一回の会には渡邊洪基、小森沢長政（米沢藩士、一八四三―一九一七）、中村正直（同人社の創立者、一八三二―一八九二）等が参加し、その中で渡邊は中国と「相輔依シテ以テ其同族同文同教ノ一団結ヲ維持シ共ニ其益利ヲ受ク所謂兄弟」のような関係になることを期待している<sup>⑨</sup>。その曾根の養子として清水彦介の四男が入籍したこと、さらに清水の長子である元一郎、その孫の得一も海軍に入っており、清水家と曾根家との関わりは彦介を通じて深く、思想的にも影響を受けていたのかもしれない<sup>⑩</sup>。

清水は明治七年、五十五歳で東京での士官を目指したが叶わず、米沢の地で自由民権運動家として活動を行った。その中で清水が特に重要視としたのが学校とそれを支える図書館（文庫）であった。それは新しい世を築くための人材の育成、その場としての学校、そしてそれを支える図書館である。清水が目指した近代はどのようなものであったのだろうか。山形県内で明治初期に「近代図書館」構想を起した清水彦介という知識人の動向及び思想を見ながら、米沢における近代化の流れを見ていくことにする。

## 一、清水彦介の出自とその資料

清水彦介は、文政四年（一八二二）に父曾根藤四郎俊徳と母貞（小見氏出身）の次男として南原村にて出生<sup>⑪</sup>、家は御馬廻組に属していた。初め龍助、敬太郎、敬二郎、名を坦、字を子蕩、号を素庵、天雷子と称し、彦介と名乗ったのは慶応四年以降であった<sup>⑫</sup>。墓標は米沢市遠山町の西明寺の緑深い地にある。兄に曾根俊臣（敬一郎、号魯庵）があり、弘化元年（一八四四）には興讓館の助読となり、慶応元年時には友于堂頭取を務めた俊才であったが<sup>⑬</sup>、戊

# 清水彦介関係図



辰戦争の激戦地の長岡大黒で戦死する。その長子が先に述べた曾根俊虎である。<sup>14)</sup>

清水は次男であつたが、学問への志高く、弘化二年（一八四五）、江戸の古賀塾の塾生となり古賀侗庵に師事、侗庵没後の弘化四年に米沢に戻ると、下矢来町の清水政蔵の跡を継ぎ、政蔵の妻であつた都義を娶り、五十騎組に属す清水家を継いだ。<sup>15)</sup> 彦介と都義との間に四男一女がおり、長男の元一郎（嘉永三年生）が明治七年七月、彦介の跡を継いだ。次男の信順は幼少より貧困のため蔵王堂法印に預けられ、明治三年、北目賀多家の目賀多幽雲信清の養子となり、翌年に目賀多家を継ぐ。<sup>16)</sup> 四男の貞四郎は曾根俊虎の養子となつた。

清水家を継いだ後、嘉永七年（安政元、一八五四）、浦賀に黒船が来航した時には清水は警衛のために上京、また慶応四年（明治元、一八六八）の戊辰戦争にも従軍、明治二年正月十五日には六之大隊十番隊頭に任ぜられた。同三年九月には藩議寮議員として選出、同四年には興讓館二等教授、翌年には白子神社の祀官となり、さらに教部省が設けた教導職に就き、試験を受けるために上京していた際の明治六年五月、置賜県大参事として福井出身の関義臣が赴任してくる。彦介はこの関が強行した米沢の近代化政策について猛烈に批判、「人間ニ非ル也」とまで非難している。<sup>17)</sup>

「米沢ニ来ル必大功ヲ立テン欲ス、然ルニ米沢ハ旧藩ノ時ヨリ政綱悉ク挙ツテ学校病院天明ノ昔ヨリ備リ町村ノ制度迄大小便ヲ立ツルノ外一モ義臣輩ノ議スベキ者ナシ」、米沢は藩政下より学校や病院など建てられ、関は大功を立てようとして来たようだが、大小便所を建てる位しかすべき事はないのであるう、と清水は非難し、「誰人ノ撰挙ヲ以テ権令ニナリシヤ、政府ニテ如是人ヲ以テ牧民ノ官ト為スハ政府ノ過チ也」と、関を任命した政府にもその責を求めている。<sup>18)</sup> 清水は関の性急な策を訴え、意見書を提出していたが、当時、白子神社の土地所有関係でも係争が起き、関の件で目をつけられていた清水は白子神社の祀官、大講義職も罷免されてしまう。

明治七年（一八七四）、清水は元一郎に家督を譲り、隠居。翌年には東京の目賀多信順宅に住み、東京での仕官を目指したが叶わず、同九年、青森裁判所勤務を命じられ、すぐに辞表を提出している。<sup>19)</sup> その後は信順とともに米沢

市立米沢図書館の清水彦介本

コレクション名	タイトル数
米沢善本	5部
林泉文庫	9部
鶴城叢書	10部
興譲館本	708部
[地域史料] 清水彦介資料	73部
総数	805部

に帰省、明治十三年三月には藩議寮議員の一人でもあった江口復蔵とともに『米沢新聞』を刊行、次いで目賀多信順を社主として『奥羽新報』『置賜新聞』と創刊するが、いずれも一年弱の短い刊行であった。しかし、清水は新聞について「電信鉄道ト相並テ文明ノ器械」<sup>20)</sup>であると考え、自身の主張を行う場として刊行を試みたのだと思われる。

さて現在、清水彦介の資料は市立米沢図書館に概ね収蔵されている。明治四十四年（一九一）に孫の得一が同館に寄託し、昭和十三年（一九三八）に寄贈されたものが主だと思われる。<sup>21)</sup>そして昭和十八年の『珍書目録』によれば、清水彦介の資料は二四三五冊寄贈されたと記載がある。その後、米沢図書館の整理過程のなかで特に興譲館本に収蔵され、現在は表のように分散され、整理している。地域史料「清水彦介資料」七十三部は明治四十二年の財団法人米沢図書館時代から「郷土資料」として整理されていたもののうち、清水の蔵書印が捺されているものを昭和後期の頃か、再整理したという。上位コレクション「地域史料」中の下位コレクションとして再整理されている。その整理の中で指標となったのが清水の蔵書印であり、現在八点程見つかっている。曾根時代の印として考えられるのが「曾根坦」「子蕩」「曾根蔵書」、弘化四年（一八四七）に清水家を継いで以降は「矢来清水氏」、安政七年（万延元、一八六〇）閏三月に家屋を新しくした際にその家号を「尚志堂」と名付けた。それ以降の印として「清水 尚志堂叢書」が捺されたのだと思われる。また明治五年から七年まで、白子神社の祀官をしていた時代に捺されたものに「清水彦介（官）」「祀官（官）」「羽前国置賜縣（祀官）清水彦介」がある。<sup>22)</sup>このほか、印とともに書籍に付箋「清水本」が貼られているものも複数ある。それは米沢図書館にて貼られたものだと思う。

各コレクションに清水彦介の資料（以下、清水本と称す）が収蔵されている経緯について、この表のうち、鶴城叢書十点は清水の著作を昭和初期に米沢図書館で書写したものであるので、厳密に言えば清水彦介の資料群とは言えない

い。米沢善本は、昭和三十三年（一九五八）に『米沢善本の解題と研究』が刊行された際に、同館の善本をコレクション化したもの、林泉文庫は二代目館長の伊佐早謙（一八五八～一九三〇）の自宅に設けられた文庫の名である。<sup>23</sup> 米沢善本はコレクション化した際に分けられたのがわかるが、林泉文庫にある清水本は伊佐早が図書館とは別に収集したものか、図書館に収蔵されたものを自身の文庫に入庫したのか、おそらく後者かと思われるが、このような経緯で分散化した。

清水本の収蔵が最も多い興讓館本は、元々、明治四十年（一九〇七）十月に興讓館財団から同館に寄贈された一万二千冊余を基とするものである。同年に作成された目録『興讓館伝来目録』では鷹山公御手沢本二九〇冊をはじめとして七五八部（一三、三一九冊）の目録であったが、<sup>25</sup> 昭和三十九年（一九六四）の調査では、二二、三三三冊と一万冊余増加している。<sup>26</sup> 興讓館本は藩校興讓館から伝来されたものとみと考えられがちであるが、米沢図書館が収集してきた古典籍・古文書の中から米沢善本の名で整理されたもの以外の古典籍類を一括して「興讓館本」として、米沢図書館の整理の歴史の中で形成されてきたものである。従って、この中には米沢図書館が開館以来、各藩士の家から寄贈された文書や館が「郷土資料」として収集してきた資料もあり、それが『国書総目録』に掲載され、世に興讓館伝来書籍として広まった。<sup>27</sup> 清水本も恐らくこのような経緯で興讓館本に組み込まれたのであろう。そのほかに清水本は閉架書庫中にも数点あり、『上杉中興美談』（K289/ㄱa）には清水本の付箋が、『絵本伊達顯秘録』（K913/E）には「清水彦介（官）」印が捺されており、その全貌の把握は今後の課題でもある。

では清水本の蔵書内容について、境沢和男氏によると次のように分類される。<sup>28</sup>

（１）刊行されたもの、及び刊行を予定して執筆されたと推定されるもの。（中略）『米澤新聞』の論説、『奥羽新報』の論説及び同連載記事等。

（２）上書、建白書、意見書の類。

（３）教導職時代の講義録、教材、家塾の教材、塾生のための学習手引の類。



(4) 隨筆風の所感、回想記の類。

(5) 歴史的諸文書の写(維新後の国、県の布達の類を含む)。

(6) 刊本、新聞・雑誌記事の抄録の類。

(7) 他者の依頼に応じて執筆したもの(祝辞、宣伝広告文、各種規約・規則の草稿を含む)。

(8) わが子及び孫に与えた遺戒の書。

大方このように分類されるが、その他に自身の文庫「尚志堂文庫」の蔵書目録や興讓館蔵書目録、また大きくは目賀多信順の蔵書印が捺されたものも清水関係書とまとめることができるのではない。また現在までに刊行されている清水の書籍は、孫の清水得一が昭和九年(一九三四)に刊行した『上杉謙信偉業録』がある。この本は、明治二十四年九月一日付の博文館宛の清水の書簡にあるように同社に出版を依頼したらしいが、それは叶わなかったようである。<sup>28)</sup>

さて、米沢図書館には明治四十四年、清水得一により寄託を受けた時の記録だと思われる『博文館寄贈・尚志堂委託図書目録』が残っているが、ここに記載されている清水本は現在、興讓館本や清水彦介資料に収書されているから、また先にあげた開架資料『上杉中興美談』などであるが、その多くは行方不明である。

また、この目録にある博文館とは、明治期に『太陽』や『文芸倶楽部』、『少年世界』等の雑誌で人気を博した長岡出身の大橋佐平が東京で興した出版社である。佐平の娘婿に米沢出身の大橋乙羽(本名 渡部又太郎)がおり、その義兄である大橋新太郎が米沢図書館に寄贈した七二六冊が記載されているのがこの目録である。そして、この寄贈を裏付けるものとして「感謝状臺帳」がある。<sup>29)</sup> ここには、その明治四十二年十一月に図書を寄贈した大橋新太郎のほかに、池田成章や米沢出身の吾妻健三郎の出版社である東陽堂、そのほか出版社や新聞社から多数の寄贈図書・雑誌・新聞が寄贈されていたことがわかる。米沢図書館の開館の際には興讓館財団からの寄贈書のほかに、市内有志者からの寄附金で購入した書籍、そしてこのような個人や出版社からの寄贈もあり、開館したことがわかる。<sup>30)</sup>



## 二、近代図書館としての米沢図書館

さてここまで清水本について述べてきたが、ここで米沢図書館の歴史について触れておきたい。明治四十二年（一九〇九）十月七日に開館した財団法人米沢図書館は、昭和十三年（一九三八）の市営化を経て、平成二十八年（二〇一六）より指定管理者制度となっている。その米沢図書館のはじまりを辿れば、直江兼続が法泉寺境内に設けた「禪林文庫」に端を発するといわれ、現在も直江兼続ゆかりの資料が収蔵されている。その後の米沢藩政下においては「米沢蔵書」印、「麻谷蔵書」印、「稽古堂蔵書」印等の蔵書印が捺されている書籍からも推察されるように<sup>33</sup>、米沢城内または江戸屋敷内の藩庫に所蔵されていた。そのほかに藩校興讓館には書庫「御文庫」が置かれ、その蔵書には「興讓館蔵書」印が捺されていたのだと思われる。

近代に入り、全国的に各地域の図書館設立を求める声が高まる中、明治四十年には米沢中学校校長の松山亮、のちに二代目館長となる伊佐早謙らによって「図書館財団設立趣意書」が提出された。

私カニ案ズルニ社会ノ文化ヲ進ムル事業ハ一ニシテ足ラズト雖モ学校ニ次ギテ有効ナルモノハ図書館ヲ以テ最トス、是故ニ欧米先進ノ諸国ニ於テハ皆盛ニ之ヲ設立シ我國ニ於テモ近來漸ク其設置ヲ見ルニ至リ輒近文部省ノ調査ニ依レバ其数既ニ百余ニ及ビ其他官公私立学校ニ附設スルモノ亦少カラズ、然ルニ本縣ニ於テハ山形市ニ聯合教育会所属ノ図書館アルノミニシテ其他ノ郡市ハ僅ニ其計画ノ端諸ヲ見ルニ止マリ未ダ館ノ体裁ヲ具スルニ至ラズ、実ニ本縣教育上ノ一大缺典ナリト謂フベシ、<sup>34</sup>

社会の文化を進めるためには一つでは足りないが、その中でも「学校ニ次ギテ有効ナルモノハ図書館ヲ以テ最トス」と述べている。この「趣意書」の翌年には設置の認可が下り、明治四十二年十月七日に開館式、同月十七日には一般

公開が始まった。その背景には、私立米沢中学校が県立に移管する計画があり、藩の貴重な古典籍類が藩外に流出する可能性が危惧されたということがあったという。<sup>95)</sup>

この「趣意書」に書かれているように県内の図書館の開館状況は山形市に連合教育会所属の図書館（私立山形図書館、明治二十五年開館）<sup>96)</sup>があるのみで、ほかの都市では計画は持ち上がっているが、まだ開館には至っていないという。県内では当時、酒田書籍講読会が発足（のちの酒田市立光丘文庫、明治三十四年発足）、西置賜郡図書館（のちの長井市立図書館、明治三十五年開館）が設立されるなど、各地で図書館の開館に向けての胎動は生まれていたが、この「趣意書」を出した松山や伊佐早においては、欧米の先進諸国にあるような図書館はまだ県内では少ないと見ていたようである。米沢においては、明治八年に私立米沢中学校が開校、興讓館伝来本もそこで人民に縦覧させていたという状況であった。<sup>97)</sup>

さらに米沢図書館の設立の背景について、「米沢新聞」の記事には次のように報じられている。

去る七日米沢図書館開館式を挙行せり。館長松山中学校長は、図書館開設の経路と後来の希望とを述べたり。其大要は、本館設立発起の動機は日露戦役に際し各地記念事業の盛んに勃起せし当時、図書館を設けて之れを紀念に備へ教育の普及を図らんとするに起り、米沢財団及び上杉伯爵家其他有志家の賛成を得て今日に至りたるものなり云々。維持の方法に就ては、米沢財団に於て多少の補助をせらるゝの約あるも確然たる方法の定りたるに非らざれば、後来は有志家の賛助を得るに非らざれば、発展の途なきを以て助勢せられ度旨縷述せり。次に馬淵本県知事は演壇に立て、先づ図書館は教育上欠く可らざるの必要を説き、図書館には種々の種類あるも本館の如き通俗的図書館は地方に適したるものなりと賞揚し、財団より寄贈せられたる珍本の蔵せらるゝは結構なるも、右は学者の考書類なれば時勢に適す可き新刊書籍の充分に備へられんことを望み、単り法人たる図書館の力に発展を頼むは無理なる注文なれば、有志家の助力を以て大に發展せしめ、本館の目的たる教育の普通を謀り度ものと

なり。<sup>38)</sup>

前傍線部にあるように、財団法人米沢図書館は「日露戦役に際し各地紀念事業」の一環として発起されたものであった。明治三十八年（一九〇五）九月にポーツマス条約が結ばれ、日露戦争に勝利した戦捷記念事業として図書館の開館が全国でも相次ぐ。その背景には明治三十二年、図書館令（旧）が交付され、公共図書館にその法的根拠が与えられ、教育制度上の位置が明示されたことも大きく関係がある。<sup>39)</sup>さらにこの「米沢新聞」の記事で注意したいのは、山形県知事馬淵銳太郎が米沢図書館を「通俗的図書館」と述べていることである。「財団より寄贈せられたる珍本」、これは興讓館財団からの寄贈資料であるが、この書は「学者の考書類」であり、「時勢に適す可き新刊書籍」を備え、「教育の普通」を謀るべきものが図書館であると述べている。この通俗図書館とは、佐野友三郎（一八六四―一九二〇）によれば、

書籍に読むための書籍と調べるための書籍との二種あるごとく、図書館にも研究調査を主とするものと通俗閲覧に重きを置くものとの二種あり。前者にありては成書は勿論、研究資料の網羅蒐集を期し管理、殊に圖書の分類、目録の編纂に主力を注ぎ館外貸出も行わざるにはあらざれども主として館内において閲覧せしむ。後者は通俗圖書を主とし、出納手続を簡易にし館外貸出に重きを置きて効果の普及を専一とす。前者が高級または特殊の研究を目的とするに對し、後者は社会一般の教化に資し国民全体の智徳増進を目的とす。前者を参考図書館といい、後者を通俗図書館と称す。<sup>40)</sup>

と、「社会一般の教化に資し国民全体の智徳増進」を目的としたものであるという。佐野は欧米の図書館思想を体系化し、実践を試みた日本近代図書館の生みの親である。通俗図書館の普及に力を入れ、また寒村僻地の住民にも読書

の機会を与える巡回文庫の導入も進め、赴任した県立山口図書館や秋田県立秋田図書館で巡回文庫等を実践していった<sup>④</sup>。

財団法人米沢図書館は馬淵知事が述べていたように通俗図書館の側面があるという。それは繰り返しになるが、『博文館寄贈・尚志堂寄託図書目録』に所収の書籍や、開館にあたって新しく購入した和漢書九三五冊、洋書・欧文辞書六五冊、各出版社、新聞社からの寄贈資料が備えられていたからだと思われる<sup>④</sup>、米沢図書館が「近代図書館」として出発できたのはこの「通俗図書館」としての機能も備えていたからである。

さて、米沢図書館の開館から遡ること明治二十五年（一八九二）頃、県内でも図書館構想の初期にあたるこの時期に清水彦介によって書かれたのが、「米沢文庫設立案」である。

天下ノ宝書籍ヨリ大且重キ者アラザル也、社会ノ万事書籍ニ非レバ天下後世ニ伝フベカラザルヲ以テ也、皇太神宮ノ聖徳至善ト雖モ唯口碑ニ任セテハ今ニ至テ其男体ナル哉女体ナル哉ヲ詳ニスベカラズ、故ニ文明国ニ至テハ皆書籍ヲ尊重セザルナシ、故ニ今西洋諸国其人之遺愛遺徳ヲ後世ニ伝ヘント欲スル者必其文庫ヲ建ツ<sup>④</sup>

書籍をにおいて天下の宝というべきものはなく、社会の万事すべて書籍がなければ後世に伝えることはできないと清水は述べ、たとえば皇太神宮、アマテラスが男体なのか、女体なのか、書物に書き著さずに「口碑」に任せていたため、明らかににはなっていないではないか、という。西洋諸国は書籍に書き著し、「遺愛」や「遺徳」を後世に伝えるために書籍を残し、またその書籍を保存するための文庫を必ず建ててきたと主張する。つづけて、「城州ハ天下ニ忌マレ、国ニ忌マレ、其忠良ヲ没シ以テ大奸人トナスアリ」、直江兼統は天下の「大奸人」として忌まれてきたが、「直江ノ精神一二米沢ヲ繁華ニスル在リ、今米沢実ニ文明ニナリ人民皆直江ノ遺徳ヲ被リテ人民ヨリ醸出スル金錢ヲ以テ書籍ヲ購求スルヲ得ルヲ以テ也」<sup>④</sup>、米沢が繁栄し、文明を築けたのもすべて直江の遺徳によるもので、その徳を被っ

てきた人民より生じた金銭で書籍を購入できているわけである。人の功績を伝えるために当世においては石碑を建てることが流行しているが、それよりも「書籍ニ至テハ人ニ知識を与ヘ世務ヲ弁シ前言往行ヲ知り以テ德行ヲ蓄ヘシム其利極リナシ」、書籍は人に知識を与えるだけでなく、世務を分別し、先人の前言往行を知り、德行を蓄えることができるものであるという書籍の効用について述べる。また、福沢諭吉の『西洋事情』を引き、欧米諸国が図書館を建て書物を保管してきたことは「誠ニ健羨スベキ」ことであると述べている。

清水が望んだ「書籍館」とは、「四庫八門」は言うまでもなく「雑技・雑芸・謡曲・義太夫本」までも収集するものであった。そして、世の書籍館は資金難により売却するところがあるが、「興讓館文庫や新設文庫は決して売却すべからざるや」、興讓館文庫は旧藩主が士族のために買い入れたものであり、また様々な貴重な書籍はいくら千金を積んだとしても不可得のものである。<sup>45</sup>藩校興讓館と文庫の關係についてこのように述べており、先にみた「趣意書」が述べていたように、清水においても書籍（文庫）と学校は相即のものであると考えているのがわかる。然らば「有志者米沢文庫ヲ大町ニ立ツ、其保存ニ苦ミ之ヲ廢セント欲」しているのであれば、米沢中学校にその文庫を移し、堅く規則を設け、書籍を永く保存すべきである。このように清水は述べ、「米沢ノ人民誰彼トナク博ク閲覧ヲ許」することから始まる規則まで考察している。では、最後に清水における学校と文庫の關係について見てみたい。

### 三、学校と図書館

松溪学校が新築され開業する際に清水は「夫レ学校ハ人ノ人タル道ヲ学ブ所ニシテ一日モ廢スベカラザル者也」と述べた。「人ノ人タル道」を学ぶのが学問である。さらに学問は「天地萬物ノ理ヲ悟ル」ために行うもので、「人ノ德行ヲ養育シ善人成人タラシムル」ものである。<sup>47</sup>そもそも清水がいうには米沢藩における学校のはじまりは「旧藩代明和八年五月鷹山公学ヲ好マレ学問ニアラザレバ国ヲ治メ民ヲ安ンズル能ハズトテ大儒尾張ノ人細井平洲先生ヲ師

トシ米沢ニ聘シ元細工町商社ノ地へ学校ヲ建築シ興讓館ト号シ」たことから始まり、以降「孝悌忠信仁義礼節」を藩内で広め、国を治めてきた。それが「醸良ナル風俗」を築いてきたのだという<sup>48</sup>。であるから、その遺臣である我々は、学校を以て「学問ヲ盛大ニシ礼義ニ因テ出ヅル所ノ源」とすべきである<sup>49</sup>。しかしながら、

維新ニ及テ政府ニテ文部省ヲ置キ学制ヲ設ケ全国ヲ七大学區ニ分チ町村必小學校アリ、邑ニ不学ノ戸ナク戸ニ不学ノ人ナカラシム、前古未曾有ノ盛事ト云ベシ、然ドモ豪傑ノ人村未出デズ、俊秀ノ学者未出デズ、人情日ニ輕薄、風俗日ニ頹敗底止スル所ナキモノ、如シ、修身学ノ未行ハレザルガ為カ抑教師其人ニ非ルガ為カ輕歎スベキ也、<sup>50</sup>

維新後は文部省が学制を敷き、村に不学の者が不在程、学問が盛事であるにもかかわらず、豪傑な人物も、俊秀の学者も出ない上に、人情も輕薄に、風俗も退廃しているではないか。それは「修身学」が行われていないせいなのか、そもそも教師その人の非があるのか。このように考える清水の思想は確かに境沢氏がいうように前近代的な思想、孔孟の教え、儒学のものである<sup>51</sup>。さらに清水は「文語」において「世界万国ヲ歴覽スルニ最モ先ニ開ケ最モ早く文明ヲ致シタルハ第一ニ支那、次ニ天竺小亜細亞・及埃・皇國也」<sup>52</sup>と、文明開化と世間は言っているが、世界万国の歴史を見るに最も早く文明が開かれたのは中国、そして次にインド、小亜細亞、エジプト、そして日本であると主張、「近來ノ事一切皆西洋ニ基原」を求めているが、中国こそが文明の第一なのであるという。その考えが特に現れているのが次の文章である。

大学ノ一書人間經濟ノ道具ル其三綱領ハ人ノ此世ニ生レテ万物ノ靈タル所以ノ本原ヲ明ニス、其八條目ハ興業殖産活計ヲ立テ文明開化ヲ致ス所以ノ道ヲ明ニス、格物致知ハ即チ西洋ノ究理学ニシテ天文地理動植鉱農工商一切

諸科学此中ニアリ、(中略) 平天下ハ即チ文明開化ニシテ開物成務ハ即チ興業殖産也、改良トハ孔子ノ温故知新ニシテ電信鉄道蒸氣機械皆大学ノ格物致知ヨリ發明シタルモノ也、<sup>53)</sup>

「大学」の八條目にある事物の本質を探究する「格物致知」は、西洋における「究理学」に値するもので、天文地理動植鉱農工商一切の諸科学はすべてこの「格物致知」の考中にある。さらには文明開化といい、殖産業を新時代のもののように思っているが、それは人の知識を成して物を生み出す「開物成務」の考えである、と。であるから、電信や鉄道、蒸氣機械もすべて「格物致知」から生まれている。これは一見すると前時代的で荒唐無稽な論とみえるかもしれないが、しかしそうであろうか。福沢諭吉は、

文明学を文明として之を和漢の古学に比較し、両者相互に異なる所の要点を求めれば、単に物理学の根本に拠ると拠らざるとの差異あるのみ<sup>54)</sup>

と述べている。丸山真男は、福沢が「学問の中心的位置を倫理学より物理学へ移し」、なによりも近代化の課題を「精神」の在り方としていたと述べる<sup>55)</sup>。清水のこの文明論は、福沢が克服しようとしていた前近代の精神であったが、福沢とは異なる方法での精神の克服を成そうとしていたのではないか。それ故に単にこの清水の主張を前近代的とは片づけられない問いを孕んでいる。これは本稿の問いとは異なるため別稿としたいが、これまでみてきたように清水は文科省が置いた学校では人材の育成は不十分であると考え、明治二十年頃、自分の家塾「尚志堂」を開こうとしたようである。明治二十年四月、清水が六十七歳の時に書かれた「尚志堂入学規條」には、

余ノ門生ニ於ケル来者拒カズ、去者追ハズ、誰ヲ善ミシ誰ヲ惡マン、教育ノ法一二皆之ヲ善人ニシ其才ヲ達シ独



立ノ人トナリ皇国ノ用ニ供スルヲ期ス、<sup>56</sup>

と、誰でも入学を認めるという方針を謳っている。教育は皆を善人にし、その学才を以て独立した人となり、皇国のために尽くすこと、これが学問をすることである。そして、そのためには書籍の必要性を西洋の文庫の例を引き、説いている。さらには、清水は何度も「要覧記」をはじめとした蔵書目録を作成し、自身の蔵書を孫の得一に託している。もし、書籍が紛失の危惧があるならば「寧ろ東京図書館」に寄贈してほしいと得一に述べている。<sup>57</sup> この蔵書が、のちに米沢図書館に寄託され、それとともに清水の文庫の構想も引き継がれていったのではなかろうか。

## おわりにかえて

清水は、その晩年である明治二十六年（一八九三）、直江兼統の顕彰祭を開こうとして西置賜三郡に募り、同年五月、池田成章、伊佐早幸吉（謙）、高梨源五郎、林泉寺の住職である齋藤龍仙、そして清水ら二十四名の連名で直江城州墓所修理基金を募る。<sup>58</sup> その後、大正八年（一九一九）には、米沢市長宇佐美駿太郎、伊佐早謙、高梨源五郎の発起で直江兼統没後三百年祭が開催された。<sup>59</sup> 直江兼統の顕彰は、清水において米沢の学問及び文庫への思いと重なっていたことは本稿で見たとおりである。

この顕彰において、のちに第二代米沢図書館長となる伊佐早謙と関わっており、清水は、伊佐早を「当世ノ流行学者也」と称している。<sup>60</sup> そして伊佐早もまた清水の書籍収集を受け継ぐかのように、自身の文庫「林泉文庫」を築き、また米沢図書館長時代にも郷土資料の収集及びその保管に尽力した人物である。清水や伊佐早の収集した書籍や文庫の構想、これが近代図書館としての米沢図書館の母体であったのだと思われる。

① 清水彦介「戊辰乱之起源」(天雷子 続四)、市立米沢図書館所蔵 清水彦介資料(三)

② 清水彦介について言及した先行研究としては境沢和男「米沢地方における西洋思想受容過程の一断面―清水彦介の生涯と思想」(『近代学校成立過程の研究―明治前期東北地方に関する実証的研究』、御茶の水書房、一九八六年。岩本篤志「清水彦介撰『入学読書図説』と興譲館蔵書―四部分類の導入に関連して―」(『環日本海研究年報』十六号、二〇〇九年)が挙げられる。

③ 前掲注1「戊辰乱之起源」

④ 友田昌宏「戊辰雪冤―米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」、講談社、二〇〇九年、一九頁。

しかしながら、宮島と清水は、維新後、米沢義社をめぐり対立をする。清水は義社の分配された金穀は「自主自由ノ権ヲ有ス」と主張、宮島は「自主自由ヲ名トシテ徒ラ自己ノ權利ヲ誇張」するのはかえって義務を果たさず、「無智蒙昧ノ人民」の言と考えていた(友田昌宏「置賜・山形県政下における殖産興業政策―「民権」論の文脈から―」(『未完の国家構想―宮島誠一郎と近代日本―』、岩田書院、二〇一一年)、四七七頁。

⑤ 「興亜公報」第一輯、明治十三年三月二十四日(黒木彬文・鱒澤彬夫編『興亜会報告・亜細亜協会報告』第一卷、不二出版、一九九三年)、五頁。

⑥ 瀧井一博『渡邊洪基―衆知を集むるを第一とす―』、ミネルヴァ書房、二〇一六年、二〇―二七頁。

英学の必要性を感じていた藩の要人たちは戦後処理のための不在で、渡邊は報酬もでない中、私室で独自の英学指導を行っていた。藩校興譲館は戊辰戦争中、負傷した藩士の治療場となっていたが、明治二年に学校が再開、洋学の必要性が高まり、明治四年一月に館内に洋学舎が建てられた(松野良寅「学館興譲館の変遷」、『米沢市史編集資料』第八号「幕末から明治初期にかけての教育事情」、米沢市史編さん委員会、一九八二年、七―九頁)。渡邊が慶応四年の戊辰戦争の最中に、請われて米沢に残留したのもこの流れの一途にある。しかし十月十五日、開学の趣意書が高橋玄勝によって藩に提出されたが、その前月の九月四日に藩は降伏を宣言したばかりで戦後処理に追われ、学校運営は軌道にのらず、渡邊は翌年一月に東京に戻る。

⑦ 狭間直樹「曾根俊虎と振亜会」、『東亜』、四二一―二〇〇一年。

⑧ 黒木彬文「興亜会・亜細亜協会の活動と思想」、『前掲註5書』、六頁。

⑨

「興亜公報」第一輯、前掲註5書、三頁。

⑩

維新後に旧米沢藩士の海軍入りが多かった一因として松野良寅氏は「戊辰戦争以来の、米沢と薩摩の関係、長崎の海軍伝習以来、近代海軍創設の柱石」であった勝海舟の存在を挙げている（『遠い潮騒―米沢海軍の系譜と追憶―』、米沢海軍武官会事務局、一九八〇年、二二頁）。

⑪

清水彦介「要濫記」（清水彦介資料三八）。

⑫

前掲註11「要濫記」、『続米沢人国記〈近現代篇〉』（米沢市史編纂資料第十二号、米沢市史編さん委員会、一九八三年、一九〇頁。）本稿では通用している清水彦介の名で統一する。

⑬

前掲註11「要濫記」。「慶応元年分限帳―人名索引付―」、米沢市教育委員会、二〇一六年、十頁。

⑭

曾根家は『御家中諸士略系譜』（上杉家御年譜）二十三、米沢温故会、一九八六年、四四九―四五〇頁）によると、祖である曾根是言齊が長尾為景の臣として勤め、その孫にあたる彌左衛門光俊の代になり、御馬廻組に属する。光俊の子に大膳由俊と彌左衛門俊秀がおり、由俊の家はその後三代続いた後に断絶、俊秀の家系が残り、清水の父俊徳（文政十二年没）、俊臣、俊信（のち俊虎と改名。明治元年家督）と続く。

⑮

前掲註11「要濫記」。清水家は元々神職であった香知右近を祖とし、上杉景勝の代、嫡子幼少のため断絶、御堂の役人を勤めた清水藤右衛門から清水姓を名乗った（『御家中諸士略系譜』二十四、三七三―三七四頁）。

⑯

目賀多家について、米沢市上杉博物館の学芸員遠藤友紀氏のご教示を受けた。目賀多家は信順が継いだ幽雲系を本家（北目賀多家）とし、雲川系を南目賀多家と称し、米沢藩から扶持を与えられたお抱え絵師であった（米沢市上杉博物館コレクション展『米沢ゆかりの絵師たち4』、二〇一八年、三頁、一二頁）。

また、清水彦介から秋田大曲裁判支庁に在する信順宛に書簡が残っていることから、明治二十三年頃には信順は秋田に移住したことがわかっており（米沢市上杉博物館所蔵 目賀多家関係資料A2018-002-20他）、秋田区裁判所所属公証人として、明治三十四年（一九〇一）、秋田の地で没している（大植四郎編『新訂 明治過去帳―物故人名辞典』、東京美術、一九七一年、六二三頁）。

⑰

清水彦介「終身之大禍」（『天雷子 続三』、清水彦介資料三）

⑱

前掲註17「終身之大禍」

⑲

前掲註11「要濫記」

- ⑳ 「祝米沢新聞發兌」(『天雷子 続三』、清水彦介資料三)
- ㉑ 『米沢図書館一〇〇年』、二〇〇九年、十二頁。
- ㉒ 「祀官」と「官」印は「清水彦介」印や「羽前国置賜縣 清水彦介」印に、捺されているものとそうでないものがあるため、印鑑としては別印であったと思われる。
- ㉓ 昭和三十一年(一九五六)、ハーバード燕京研究所の資金援助を受けた同志社大学でハーバード燕京同志社東方文化講座委員会を組織し、東方文化の公開講座等を行った一環のなかで、付帯的に行われた米沢図書館所蔵の漢籍調査が行われた。それが機縁となり、翌年に京都大学人文科学研究所を中心とした研究者が米沢を訪れ、米沢図書館蔵書中の良本に目録解題が作成された。それを、米沢市では市制七十年の記念事業のひとつとして『米沢善本の研究と解題』を出版した(内田智雄「ハーバード・燕京・同志社 東方文化講座シリーズの終刊に際して」、『東洋史研究』一九一、一九六〇年)。米沢図書館ではこの善本解題に沿い、コレクション化し「米沢善本」と名付けた。
- ㉔ 林泉文庫は現在、米沢図書館、山形大学小白川図書館、山形県公立大学法人附属図書館、白鷹町の龍門図書館で所蔵、また米沢市上杉博物館所蔵の「上杉文書」中にも多く収蔵されている。この詳細については別稿に記したい。
- ㉕ 財団法人米沢図書館『興譲館傳來図書目録』(市立米沢図書館 内部資料)、これは明治四十年三月二日、米沢市役所に提出した目録である。
- ㉖ 赤井運次郎校註、古山英子編『市立米沢図書館所蔵 郷土資料の由緒』、市立米沢図書館、一九六九年。
- ㉗ 青木昭博「市立米沢図書館の蔵書と興譲館本」(『米沢藩興譲館書目集成』第四卷、ゆまに書房、二〇〇九年)、五六七―五六八頁。
- ㉘ 前掲註2境沢論文、八七六―八七七頁。一部省略した。
- ㉙ 清水彦介『天雷子 続四』(清水彦介資料三)
- ㉚ 『博文館寄贈・尚志堂委託図書目録』(市立米沢図書館所蔵 内部資料)
- ㉛ 「感謝状臺帳」(市立米沢図書館所蔵 内部資料)
- ㉜ 前掲註21書『米沢一〇〇年』、十頁。
- ㉝ 前掲註21書『米沢一〇〇年』、十一頁。
- ㉞ 財団法人米沢図書館「図書館財団設立趣意書」(市立米沢図書館 内部資料)

③⑤ 私立米沢中学校は、明治五年十月に布達により廃止された藩校興讓館、その実は縮小しながら継続していたのだが、明治七年に私立米沢中学校と改称した（前掲6松野書、一七一―一八頁）。

③⑥ 私立山形図書館は山形県連合教育会の設立、明治二十五年（一八九二）に山形師範学校附属小学校の校舎二階に開館した（『近代日本図書館の歩み 地方篇』、日本図書館協会、一九九二年、一〇三―一〇四頁。三春伊佐夫「黎明期における山形県の図書館」、『北の文庫』、三四号、二〇〇三年、一二―一五頁）。

③⑦ 前掲註36書、一〇二頁。

③⑧ 「米沢新聞」明治四十二年十月九日

③⑨ 『近代日本図書館の歩み 本篇』、日本図書館協会、一九九三年、二二三頁。日露戦争の戦勝記念で建設が進められた図書館は、たとえば京都府立図書館（明治三十八年、議会の可決）や、奈良県立戦捷記念図書館（明治四十一年）、弘前市立図書館（明治三十九年）等がある。

④⑩ 佐野友三郎「通俗図書館の経営」（個人別図書館論選集『佐野友三郎』、日本図書館協会、一九八一年、九頁。）佐野がここで述べる「通俗図書館」とは戦前、戦後に社会政策のひとつとして思想善導としての図書館ではなく、「満架の図書をして読衆に接せしめ、如何なる場合にありても到る処、図書と読衆とを相接」するものとして考えられている（同書、三〇四頁）。

④⑪ 前掲註39書、二一四―二一五頁。

④⑫ 前掲註21書『米沢一〇〇年』、一〇頁。

④⑬ 清水彦介「米沢文庫設立案」（『天雷子 続三』、清水彦介資料三）

④⑭ 前掲註43「米沢文庫設立案」

④⑮ 前掲註43「米沢文庫設立案」。興讓館の御文庫は、安政四年（一八五七）の「学館絵図」（市立米沢図書館所蔵、地域資料Z1006001）には絵図の東側に友于堂の近くに描かれているが、元治元年（一八六四）の通称小森沢大火により興讓館は類焼してしまい、その後すぐに学館の聖堂や講堂は同規模で再建した。この時に再建した文庫のことを、清水は「新文庫」と述べているのであろうか。

④⑯ 「松浜学校新築開業式為山口龍造」（『天雷子 続三』、清水彦介資料三）、明治二十五年六月三十日

④⑰ 清水彦介「尚志堂規條・学範」（清水彦介資料十）

- ④8 清水彦介「米沢風土記」(市立米沢図書館 林泉文庫六六)
- ④9 前掲註48「米沢風土記」
- ⑤0 前掲註48「米沢風土記」
- ⑤1 前掲註2境沢論文、九〇二頁。
- ⑤2 清水彦介「文語」(『天雷子 続四』、清水彦介資料三)
- ⑤3 清水彦介「尚志堂学範」(『天雷子 庚』、清水彦介資料二)
- ⑤4 福沢諭吉「福翁百余話」(『福沢諭吉全集』第六卷、岩波書店、一九五九年)、四二五頁。
- ⑤4 丸山真男「福沢に於ける『実学』の転回」(『福沢諭吉の哲学』、岩波文庫)、四六―四七頁。
- ⑤6 前掲註53「尚志堂学範」
- ⑤7 前掲註11「要濫記」
- ⑤8 木村徳衛『直江兼続傳』、一九四四年、九〇一頁。
- ⑤9 前掲註58書、九〇一頁。
- ⑥0 「三家合併」、(『天雷子 続四』、清水彦介資料三)